「する」文の多機能性
—文法的機能—

大　塚　　望

はじめに

これまで，動詞「する」は，その文法的な特徴から形式動詞として位置づけられ，また，その意味的な特徴からは「行う」「やる」との比較研究や，「する」自体の持つ多様な意味・用法を記述するといった研究がなされてきた。しかし，行為の実質的意味が希薄となった機能動詞としての「する」に注目し，詳細にその構文的機能あるいは，対人的機能について考察した研究は，これまであまり見られない。

本稿では，形式上の主語が事実上は述語の一部となっている「～がする」文や，形式上の目的語が述語の一部となっている「～をする」文，また形容詞が述語の一部となっている「形容詞する」文などに注目し，機能動詞という観点から考察し，動詞「する」の文法的機能について明らかにしたい。そして，「する」が文法的に多機能であることの意味論的な根拠を示していく。さらに，「する」文の構造を捉えなおし，その他の動詞・形容詞との異同についても考察を加え，動詞「する」が，日本語全体の中でどのような位置にあるのかについても考えていく。

1．先行研究

動詞「する」の先行研究は数も多く，その歴史も比較的長いと言える。「する」の先行研究を大きく分けると，その流れには5つのあり方が見られるようである。

1．形式動詞「する」の研究
2．行為動詞「する」の研究（『やる』『行う』との比較）
3．サ変動詞「する」の研究（格助詞『ヲ』の有無）
4．機能動詞「する」の研究
5．軽動詞「する」の研究（生成文法理論）

1は，実質的な意味の有無から文法範疇を大きく二分した概念である，実質動詞と形式動詞という範疇において，「する」の位置づけが行われた研究である。

山田孝雄（1936）は，形式用言の一つとして形式動詞「する」を挙げ，「心す」「音す」「重くす」「ふりする」「勉強す」「論ず」「特別化す（スペシャライズ）」「思ひをする」を例に挙げている。さらに，「すると」も形容動詞（助動詞）に入るものとした松下大三郎（1924），一方，「暖かくする」「びくびくする」「駄目だとすれば」も形式動詞に入れた時枝誠記（1950）などもある。形式動詞としての「する」研究は，動詞ないし用言を文法範疇の一つとして立ち上げ，それをさらに下位分類するという品詞論的な立場からの研究であったため，「する」に関する詳細な個別的研究というものではない。

2は，特に，同じように動作や行為を表す「やる」や「行う」との比較を中心に，その意味・用法の違いから共起する名詞の種類までを記述した研究である。その中でも，森田良行（1977）は，用例を多く記述し「する」の意味・用法に関する研究の中でも出発点となるものである。しかし，「する」と「やる」の違いは考察してあるが，その他の一般的な動詞文とどう関係するか，また共起する「～が」「～を」「～に」などの名詞句と「する」との統語的な関係についての言及などは，十分とは言えない。

3は，サ変動詞である「～する」が，時にヲ格を挿入することができる現象に注目した研究である。Miyagawa, Shigeru（1987）や田野村忠温（1988），平尾得子（1990）では，そのサ変動詞語幹である動名詞（Verbal Noun）を分析し，動作性や意志性を基準に説明している。しかし，格表示に焦点があるために，「する」の文としての考察や他の動詞文との関係性，名詞句と「する」との統語的な関係については，十分な考察がなされていない。

4は，実質的な意味が希薄でおおむね文法的な機能を果たしている動詞（機能動詞）という観点から，日本語動詞全体を捉えた研究（村木新次郎1980，1991）である。全体を見ての位置づけという点で1と共通している。「する」については，「名詞＋する」を中心に文型が整理されているに留まり，日本語全体における位置づけや周辺も含めた考察という点では考察すべき点が残されている。

5は，3の支流とも考えられ，動名詞（VN）は，他の要素に意味役割を付与する（意味役割付与）能力を持つ点から，そのメカニズムを解明するという生成文法理論からの研究である。Miyagawa(1989)，加賀信広（1993），影山太郎（1993，2004a,b）などが，その原理的説明を試みたもので，「する」が取り上げられている。動名詞と「する」との関係性を考察する点は，3よりも充実しており，「する」とその他の一般的な動詞との相違や，一部形容詞との違いについて触れられているものの，まだ十分ではない。また，軽動詞は，「動名詞ヲスル」

の一部と身体属性を示す「青い目をしている」のみであるとする点など，「する」全体を捉えるのではなく，その一部に限定されている。

以上，動詞「する」は，このように様々な違った観点から研究されてきたと言えよう。その中で「する」の果たす文法的機能について注目した研究は，4，5である。しかし，それらもそれぞれの観点の違い，目的の違いから，考察が「する」の一部に限定されており，「する」の持つ様々な機能や，それを踏まえての，動詞全体，あるいは日本語全体における位置づけなど，まだ考察すべき点が残されている。特に，両者によって機能動詞，軽動詞の枠外に出されてしまった用法についても，本稿で改めて考察しなおすことによって，「する」の持つ多機能性という特徴を明らかにしていきたい。その意味では，本稿は機能動詞の広がりを新たに捉えなおすものであり，4の機能動詞研究の流れに位置づけられるものと考える。

2.「する」の機能動詞論

動詞「する」の文法的機能について見直し，「する」及び「する」文を考察するのに，どのような方法が妥当であるか考えてみたい。

例えば，「マスクをする」の「マスク」は具体的な物体を示しているが，「調査をする」の「調査」は動的な事象を示している。この違いは名詞だけに留まらず，「する」との関係性においても違いを見せている。後者の「する」は，前者の「する」よりも「動作」の実質的意味・内容が希薄になり，述語を形成するという文法的な機能のみを有すると考えることができる。このような「する」を機能動詞とする。

また，「きれいな目をしている」の「きれいな目」は物体を示しているが，「している」はアスペクト形式をとりながら，動作の継続でも変化の結果でもない，状態を示している。このような「する」もまた，述語を形成するという文法的な機能のみを有すると考えられるのである。

さらに，「いやなにおいがする」は，名詞句「いやなにおい」が持つ実質的意味と，述語形成のための機能動詞「する」が持つ文法的機能とを組み合わせることで，「におう」という実質語の動詞一語に相当する述語となる。さらには，「くさい」という実質語の形容詞一語に相当する述語となるのである。

このように，「する」は動詞だけでなく，形容詞が示す意味にまで広がっていることがわかる。「する」が機能動詞として，どのような広がりを持つのかを見

ることにより，その多機能性を記述できるのではないかと考えるものである。

しかし，機能動詞論における機能動詞とは，「名詞＋動詞」との語結合に限定されている。そのため，「きれいにする」「赤くする」などの「形容詞（形容動詞）＋する」は，「近接したもの（村木1991）」，「しばらくする」「数年して」「閑散とする」などの「副詞＋する」は，「機能動詞結合の周辺（同）」とされている。さらに，サ変動詞や「脅迫さえする」「読んだり書いたりする」などは，「機能動詞の枠外（同）」と除外されている。しかし，これらの「する」に実質的な意味を見出すのは難しく，やはり機能的な動詞としての振舞いを示すと考えられるのである。したがって，機能動詞論では「近接，周辺，枠外」とされる「する」にも，実質的意味の希薄さと文法的機能性の顕著さが示されていると考え，本稿では，考察の対象に入れていくことにする。

本稿は，機能動詞論の枠組みを借りながらも，従来の機能動詞の定義では除外されてしまう，これらの機能的な表現も包括的に捉え，その全体像を明らかにしていきたい。

3．「する」文に見られる文法的多機能性

動詞「する」を通常の動詞としてではなく，機能動詞と見なしうる文法的特徴について多面的に考察する。

3.1「する」と語の結合度

「本を読む」では，「本」と「読む」のそれぞれが独立した要素として出現している。それに対し，「調査をする」は「調査」と「する」が先の例と同程度に独立した要素とは考えられない。そこで，語順の交替によって「する」とその他の要素との結合度を見てみる[1)]。交替テストを行う要素は，動詞「する」の実質的な意味を担うと考えられる語句とする。以下，例文と，交替後の例文（→以降）である。機能的な語の結合部分を下線で示してある。

（1）ここに開会の宣言をする。　→開会の宣言をここにする。
（2）あー，頭痛がする。　→＊頭痛があーする。
（3）胃がキリキリする。　→＊キリキリ胃がする。
（4）台所からいやなにおいがする。→いやなにおいが台所からする。
（5）留学を希望する。　→＊希望留学をする。
（6）友達とテニスをする。　→テニスを友達とする。

（7）息子を医者にする。　→＊医者に息子をする。
（8）部屋をきれいにする。　→＊きれいに部屋をする。
（9）顔を赤くする。　→＊赤く顔をする。
(10) 環境破壊を問題とする。　→＊問題と環境破壊をする。
(11) 鉛筆が一本百円する。　→＊一本百円鉛筆がする。
(12) 彼女はきれいな目をしている。→？きれいな目を彼女はしている。
(13) 授業中は読んだり書いたりする。→読んだり書いたり授業中はする。
(14) しばらくすると雷は鳴り止んだ。→＊しばらく雷はすると鳴り止んだ。

「する」文は，「する」と結合している要素を引き離してしまうと，上記のように不自然，あるいは非文になるものが多い。各文における結合度は一様ではないが，このように語順交替が許されないことを考えると，「～する」は「語＋動詞」で一語的な働きを示すものと考えられる。つまり，実質的な意味をその他の要素（名詞，形容詞，副詞，動詞，擬態語など）に担わせ，動詞は述語としての文法的な機能を果たすことが主になっている，機能性の動詞であるということである。

3.2「～する」動詞一語相当

先で，動詞「する」と語が強く結びついており，語順の交替を許さないものが多いことを見た。結合が強いということは，意味が希薄な動詞「する」がその実質的な意味を担うものとして他の語を必要とし，その語から離れて文中に存在することが難しいことを示している。これが顕著に現れていると考えられるのが，漢語や外来語と「する」が結びつくことによって，動詞化し，サ変動詞と呼ばれる動詞に変化しているものである[2)]。

(15) 太郎が次郎に電話する。
(16) 太郎が次郎に屈する。
(17) 太郎が次郎を集中攻撃する。
(18) 太郎が次郎をプッシュする。

サ変動詞は通常の動詞と異なり，その構造を「名詞（語）＋する」に分析でき，実質的意味を担う「名詞」部分と文法的な働きを担う「する」とに分けて捉えることができる。しかし，通常の動詞は，文法的な機能と実質的な意味とは融合して存在するので，例えば「あそぶ」の「あそ」までが実質的な意味を担い「ぶ」が文法的な働きを担っているとの分析は不可能である。それゆえに実質動詞である。したがって，サ変動詞は通常の動詞のように「動詞」という同じ枠組みに入

れてしまわれるが，改めて語結合の観点から見るならば，サ変動詞は語と語が結合して形成された複合語であり，通常の動詞とは大きく異なる。ただ，その結合の強さによって一語相当の振舞いをなすために，「する」の活用の型から，サ変動詞と分類されているにすぎない。このように捉えるならば，「擬態語＋する」「副詞＋する」「形容詞＋する」「形容動詞＋する」もまた，その語結合の強度から同様に，一語相当として文中で機能していると考えることができる。もはや，「漢語＋する」や「外来語＋する」のサ変動詞だけが特別なのではなく，その文法的特徴はこれら全てに共通しており，いずれも一語として振舞う機能性の動詞であると捉えるべきであろう。

また，「名詞にする」「名詞とする」も，動詞「する」と名詞部分との結合が強く，先の交替テストでは不自然になるものである。これらは動詞と名詞の間に格助詞という文法機能を示すものがある点が，先の直接その他の語と結合するものと異なっている。しかし，その振舞いはやはり一語相当との見方ができる。以下の例は，実質的な意味を持つ通常の動詞と比較したものである。

(19) 着ていく服を赤いのにした。　→？着ていく服を赤いのにさっきした。

(20) 着ていく服を赤いのに決めた。→着ていく服を赤いのにさっき決めた。

(21) 70点以上を合格とする。　→？70点以上を合格と教師がする。

(22) 70点以上を合格と見なす。→70点以上を合格と教師が見なす。

語順の交替後は，「する」文の方が，実質的意味を担う部分が離れた結果，文として不安定なものに変わっている。しかし，通常の動詞には不安定さは生じない。このことを見ても，「名詞にする」「名詞とする」が結合の強い一語的な振舞いを文中で見せることがわかる。いずれも，「する」が文法的機能を示すのを主とする動詞であることを示している。

3.3　動詞一語との置き換え

一方で，交替テストで分離不可能なほど結合度が強くないため，一語相当との文中での振舞いはなくとも，その語結合がその他の動詞一語に相当するものが存在する。これは，岩崎英二郎（1974）や村木（1980，1991）によって機能動詞結合として，特に取り上げられている点でもある。岩崎（1974）が，ドイツ語学から借用して始まったと考えられる機能動詞研究は，「名詞＋動詞」が他の動詞一語に変換できるようなタイプの動詞を機能動詞とするのが，その原型である。そのような当初の機能動詞の定義に従えば，最もそれにふさわしいのは，サ変動詞に変換できるような「名詞をする」の「する」動詞ということになる。「名詞を

する」には意味的・構文的な観点から，動詞一語と同じ特徴を持つものが見られ，格の交替があるものの，その他の動詞一語と置き換えられる。

（1）ここに開会の宣言をする。　→ここに開会を宣言する。

(23) 子供が歌手の真似をする。　→子供が歌手を真似る。

(24) 朝は水汲みをして，床磨きをした。→朝は水を汲んで，床を磨いた。

(25) 太郎は花子に指輪のプレゼントをした。→太郎は花子に指輪をプレゼントした。

(26) 太郎が花子に英語のレクチャーをする。→太郎が花子に英語をレクチャーする。

また「～にする」の中にも動詞一語と置き換えられる例がある。

(27) 困ったときは太郎を頼りにした。→困ったときは太郎を頼った。

村木（1991）では，「においがする（＝におう）」「かおりがする（＝かおる）」「まばたきをする（＝まばたく）」のように，「名詞＋する」が動詞一語に置き換えられることを指摘している。しかし，語結合ではなく文のレベルで考察すると，「においがする」は単独で使われることはなく，連体修飾語を必須とするために「においがする」＝「におう」とはならない。

(28) a. ＊においがするね。

b. {変な，いやな，臭い…} においがするね。＝におうね。

c. いいにおいがするね。旨そうなにおいがする。≠におうね。

厳密には，連体修飾語の付加された「におい」が，ガ格に立ち「する」を述語とする場合に，「におう」と置き換えられるのである。「～においがする」＝「におう」となる。加えて，「におう」という動詞一語と置き換え可能なのは不快なにおいに限られ，心地いいにおいの場合には「におう」と交替不可能である。

また，似た語に「かおり」があるが，「かおる」とは形態的に関連性があるものの，「かおりがする」が「かおる」に交替することはできない。それは意味的な快・不快に関係ない。

(29) いいかおりがするね。≠かおるね。

その他，連体修飾語がついた「感じ，予感がする」も他の動詞に交替できる場合がある。ただし，格が交替したり修飾語が名詞化する場合がある。

(30) あの男はいやらしい感じがする。→あの男をいやらしいと感じる。

(31) 林檎飴は懐かしい感じがする。　→林檎飴に懐かしさを感じる。

(32) 成功の予感がした。　→成功を予感した。

ただし，これらの動詞一語との置き換えが可能であることは，その両者の表現

が意味的にまったく等価であることを指すものではなく，文法的特徴としてその形態面，あるいは意味的なつながりや類似性といった点で，「名詞＋格助詞＋動詞」という句のレベルのものが，ちょうど一つの語のように振舞うことを説明したものである。

以上，語結合の強度から，「名詞＋格助詞＋する」という語と語の結びつきが，文中では一つの語としての振舞いを示すことを見た。これは，動詞「する」が機能性の高い動詞であることを示している。

3.4 形容詞との関係

「する」文には意味的・構文的な観点から形容詞文と共通する特徴を持つものがある。寺村秀夫（1984）では「～ガスル」は「基本形で言い切ったときその心的状態の主体が話し手自身」とし，感情形容詞との共通点を指摘している。改めて機能性という点から考えてみたい。

3.4.1 形容詞との意味的な類似性―形容詞一語相当―

形容詞と意味的な類似性がみとめられる最も顕著な例は，形容詞一語と置き換えられる例である。

（3）胃がキリキリする。　→胃が痛い。
(33) 頭がガンガンする，ズキズキする。→頭が痛い。
(34) 胸がムカムカする。　→（胸が）気持ち悪い。
(35) （背中が）ゾクゾクする。　→寒い。怖い。
(36) ぞっとする。　→怖い。恐ろしい。
(37) 耳の中がムズムズする。　→耳の中がかゆい。
(38) タオルがフワフワしている。　→タオルが柔らかい。
(39) 子供が静かにしている。　→子供が静かだ。
(40) 髪を長くしている。　→髪が長い。
(41) 人通りが無くここは寂しい感じがする。→人通りが無くここは寂しい。
(42) 焦げた部分は苦い味がする。　→焦げた部分は苦い。
(43) これは酸っぱい味がする。　→これは酸っぱい。

「ガンガン，キリキリ，ズキズキ＋する」は，先述したように強い結合を示し，一語相当と考えられるものである。そして，格の交替なしに「痛い」という形容詞一語で置き換えられる。「する」は，アスペクト形式の付加を義務とはせずに，ル形で状態性を示しうる。また，ル形で今現在の状態を表明するという側面から，

アスペクト形式を付加することによって，客観的に状態を描き出すという側面に移っていくことになる。

また「形容詞＋する」は変化を示すが，アスペクト形式により現在の状態を示すことになり[3]，形容詞の状態性と一致し，形容詞一語と置き換えられる。

そして「感じがする」「味がする」は，それぞれのガ格名詞に修飾する形容詞が実質的な意味を担うために，「がする」を取り去って形容詞だけを示しても意味的には変わらない。その取り去ってしまった「する」の文法的な働きは，形容詞自体が持つことになる。さらに，次の例は形容詞文と意味的に類似しながらも，意味の限定がある。

(44) 林檎飴は懐かしい味がする。→林檎飴は懐かしい。

(45) 風鈴は優しい音がする。　→風鈴は優しい。

形容詞文と比較すると「する」文の方が，ガ格名詞句に「味」「音」が示されているために「懐かしい」「優しい」の対象が何かということが限定されている。形容詞文は，どんなところが懐かしいのか，何が優しいのかがわからないので，意味に広がりがある。この意味を限定するには，「林檎飴は味が懐かしい」「風鈴は音が優しい」とガ格で示さなければならない。

しかし，同じように形容詞だけを示すと意味が異なってくるものもある。

(46) その道は狭い感じがする。　→＃その道は狭い。

(47) その道は狭いような気がする。→＃その道は狭い。

「する」文は，感覚（狭さ）を経験する主体の存在（話者）があるが，この形容詞文は感情感覚ではなく客観的判断としての性質を述べる文である。そのため，形容詞文は客観的描写として断定的，「する」文の方は感覚の主体たる話者の存在が浮かび上がり，「感じがする」がモーダルな意味を担っている。形容詞文が断定で真偽値が決定されているのに対し，「する」文ではその真偽値が保留されて話者の判断に任されている。この意味においては，「その道は狭いようだ」に近いものがある。

以上，「語＋する」が一つの述語として機能し，形容詞と置き換え可能なものがあることがわかる。「感じ，味，音がする」「擬態語する」「形容詞している」は形容詞との類似性が大きく，動詞「する」は名詞句，擬態語，形容詞に形容詞述語の特徴を与える機能的な動詞であると言える。

3.4.2　形容詞との構文的な類似性―副詞による修飾―

形容詞との構文的な類似性について考察する。西尾寅弥（1972）は「『すこし』

『かなり』『非常に』などの，いわゆる程度副詞は，主として形容詞を修飾することを職能とする」と言う。つまり，「非常に」などの程度副詞による修飾が可能であれば，それは形容詞的と言える。一方，量副詞は動詞を修飾するものと限定されている。したがって，「たくさん」などの量副詞による修飾が可能であるとすれば，それは動詞的な特徴と言える[4)]。

「語＋する」文において，程度副詞あるいは量副詞による修飾が可能か否かについて検証し，構文上から形容詞との類似性を考察する。前掲の例文（1）～(14) に「非常に」「たくさん」を挿入すると次のようになる。副詞が「する」の語結合を直接修飾させるように一部例文を簡潔にしてある。以下，挿入後のみを→以下で示す。

（1）→ここに〔＊非常に／＊たくさん〕宣言をする。
（2）→〔非常に／＊たくさん〕頭痛がする。
（3）→胃が〔非常に／＊たくさん〕キリキリする。
（4）→台所から〔非常に／＊たくさん〕いやなにおいがする。
（5）→留学を〔非常に／＊たくさん〕希望する。
（6）→友達と〔＊非常に／たくさん〕テニスをする。
（7）→息子を〔＊非常に／＊たくさん〕医者にする。
（8）→部屋を〔非常に／＊たくさん〕きれいにする。
（9）→顔を〔非常に／＊たくさん〕赤くする。
(10) →環境破壊を〔非常に／＊たくさん〕問題とする。
(11) →鉛筆が一本〔＊非常に／＊たくさん〕百円する。
(12) →彼女は〔非常に／＊たくさん〕きれいな目をしている。
(13) →授業中は〔＊非常に／たくさん〕読んだり書いたりする。
(14) →〔＊非常に／＊たくさん〕しばらくすると雷は鳴り止んだ。

（4）(12) のように連体修飾語を必須とする「する」文は，副詞が形容動詞を修飾してしまい，「語＋する」の部分を修飾するか否かの判断が難しい[5)]。そこで，これらを省くと，程度副詞による修飾が可能で量副詞による修飾が不可能であるという，形容詞的特徴を持つ例は（2）（3）（5）（8）（9）(10) であり，形容詞との類似性が見られることがわかる。

3.4.3　形容詞との構文的な類似性―比較表現―

西尾（1972）には「程度性ということは，『比較』ということと深い関係がある」とある。簡単に比較表現についても確認しておく。→以下が比較表現である。

（1）→＊前回より今回の方が開会の宣言をする。
（2）→さっきより今の方が頭痛がする。
（3）→下腹より胃の方がキリキリする。
（4）→台所より今の方がいやなにおいがする。
（5）→就職よりも留学を希望する。
（6）→友達より弟との方がテニスをする。
（7）→＊息子より娘を医者にする。
（8）→台所より部屋をきれいにする。
（9）→顔より目を赤くする。
（10）→環境破壊より核造成の方を問題とする。
（11）→＊ペンより鉛筆が一本百円する。
（12）→彼女は彼よりきれいな目をしている。
（13）→放課後より授業中の方が読んだり書いたりする。
（14）→＊さっきよりもしばらくすると雷が鳴り止んだ。

（4）（12）は比較が形容動詞に対して行われている可能性があるので，比較テストから除く。その結果，比較表現を見てみると，「語＋する」で比較表現をとるものが（2）（3）（5）（6）（8）（9）（10）（13）である。

また本来，行為の「する」には程度性はないので，何かを比較する場合には次のように量副詞を補わなければならない場合が多い。しかし，これは量的な程度性を示しており，形容詞に特徴的な純粋な程度性とは異なると考えられる。

（6）→→友達より弟との方が〔たくさん〕テニスをする。
（13）→→放課後より授業中の方が〔たくさん〕読んだり書いたりする。

以上，比較表現においても「する」文の中には形容詞との構文的な類似性を示すものがあった。

3.4.4　形容詞との構文的な類似性—人称制限—

「する」文の中に，感情形容詞の構文的特徴である人称制限が見られることをまとめておきたい。これについては，山岡政紀（2000）がすでに様々な感情動詞文の中で述べているので，確認のために，例として（2）（3）について見てみる。人称代名詞を加えたものが以下の例である。

（2）' a.（私は）頭痛がする。
b.＊君は頭痛がする。→君は頭痛がするはずだ。
c.？彼は頭痛がする。→彼は頭痛がするらしい。

（3）’ a.（私は）胃がキリキリする。

b.＊君は胃がキリキリする。→君は胃がキリキリするはずだ。

c.？彼は胃がキリキリする。→彼は胃がキリキリするらしい。

以上のように，いずれも意味上の主語（経験者格）が第一人称以外の場合には，何らかのモダリティ形式の付加が要求されることが多い。これは，感情形容詞文に見られる人称制限と同質である。

a.（私は）頭が痛い。

b.＊君は頭が痛い。→君は頭が痛いはずだ。

c.？彼は頭が痛い。→彼は頭が痛いらしい。

また，感情形容詞文の第一人称は形式化されないことが多いが，（2）～（4）の「する」文も同様である。したがって，「する」文は「する」と結合する語によって，このような人称制限を持ち得るのであり，これは形容詞との類似性を示している。

さらに（4）も感情形容詞同様に人称制限が見られるものだが，山岡(同)で指摘の通り，第一人称経験者格を表現できず「完全に潜在化している（p197）」。（2）（3）は第二人称，第三人称が経験者格の場合はモダリティ形式を付加すれば文として成立したが，（4）においては，モダリティ形式を付加してもなお文としては成立しがたいのである。その場合，引用にして補文構造の中で経験者格が第一人称になるような表現をとらざるを得ない。

（4）’ a.（＊私は，＊私には）台所からいやなにおいがする。

b.＊君は台所からいやなにおいがする。

→＊君は台所からいやなにおいがするはずだ。

→君は台所からいやなにおいがすると言うんだね。

c.＊彼は台所からいやなにおいがする。

→＊彼は台所からいやなにおいがするらしい。

→彼は台所からいやなにおいがすると言っている。

以上，「語」と「する」との結合度の強さ，さらに意味的特徴（置き換え），構文的特徴（副詞による修飾，比較表現，人称制限）から「語＋する」が，形容詞的特徴を備えた機能的な動詞結合であることがわかった。

4．形態的特徴―描く時と局面の多様性―

文法的な特徴の一つとして，形態的な特徴とテンス・アスペクトについても述

べておきたい。これらの形態的な特徴が，「する」文の意味に幅を持たせているからである。

これまでの例文で示されたように，「する」が接続している語は，名詞，擬態語，形容詞，動詞，副詞と様々であり，その中でも，名詞はさらに，具体物から抽象的概念まで存在し，様々に性質が異なっている。このことによって，「する」は「動作・行為」を示すという語彙的な意味を超えて，意味が多様化して実現していると考えることができる。

動詞はこれまで，様々な分類のされ方をしてきたが，その中には，動作か存在かで大きく分け，「ある」「いる」などが存在を表す動詞として（山田孝雄ではあえて「存在詞」という一分類を立てた），そのほかは動作を表す動詞として一括りにできるものがある[6]。あるいは，動きを表さない動詞と動きを表す動詞に二分し，前者を状態動詞と特別に呼ぶものもある。一方，動きを表す動詞はアスペクトによって様々な動作の局面を表現することになる。以下は，（1）～（14）に「た」「ている」を加えたものである。

（1）ここに開会の宣言をする／＊した／＊している。
（2）あー，頭痛がする／？した／＊している。
（3）胃がキリキリする／した／している。
（4）台所からいやなにおいがする／した／している。
（5）留学を希望する／した／している。
（6）友達とテニスをする／した／している。
（7）息子を医者にする／した／している。
（8）部屋をきれいにする／した／している。
（9）顔を赤くする／した／している。
（10）環境破壊を問題とする／した／している。
（11）鉛筆が一本百円する／した／している。
（12）彼女はきれいな目をしている／＊した／＊する。
（13）授業中は読んだり書いたりする／した／している。
（14）しばらくする／＊した／？していると雷が鳴り止んだ。

これらの例を見てみると，その多くは，何らかの行為・動作を示すという点で共通しており，「する」が動作動詞であることを示している。動作動詞のル形は「未来」を示し，タ形は「過去」というテンス的意味を示す。また，アスペクト形式は「本を読む／読んでいる」の対立で動作の継続相，あるいは「電気がつく／ついている」の対立で動作の結果相を示す。

しかし，そうではない例も多い。（1）は発話と同時に「宣言」という行為が遂行されるような文であるために，タ形もテイル形も許さない。かつ，ル形は未来を表さず，今現在を示している。しかし，主語の人称が一人称ではなく三人称になれば「ここに彼が開会の宣言をする／した／している」のように，通常の動作動詞と同様，ル形で未来を，タ形で過去を，テイルで継続相を示すようになる。

（2）もテイル形を許さない。この文は現在の瞬間的な「状態」を述べる文である。テイル形は「朝からずっと頭痛がしている」のように，継続的な状態であることを示す場合に使われる。タ形は，過去のある時点に立つ文脈において可能となる。ちなみに，形容詞文は，「あー，頭が痛い」「朝からずっと頭が痛い」のようにアスペクト形式を持たないために，瞬間の状態も継続の状態も示しうる。またその状態の違いはその他の文中の要素によって決定される。したがって，「する」は形容詞との類似性を強く持ちながらも，形態的には動詞であるために，このような類別が可能となっている。（3）（4）も同様である[7]。

(11) は形態変化するものの，ル形は未来を示さない。また，ル形，タ形，テイル形，どの形態であってもやはり状態しか示さない。(12) はル形，タ形を許さず，テイル形だけが可能で，その表す意味は状態である。しかし，動作の継続でも結果でもない。森田良行 (1977) で指摘されているように，「修飾語を冠して」使われる。また，このように主語の属性を示すような文においては，ル形を許さない。

以上の点を，金田一春彦（1950）の動詞分類に従って考えると，「する」は動詞分類の全て「状態動詞」，「瞬間動詞」，「継続動詞」，「第四種の動詞」に該当することになり，動詞として非常に多機能であると言える。また，テンスやアスペクトの意味だけでなく，文として表す意味も一様ではない。（2）（3）（4）（5）は，話者自身の感覚や知覚，願望といった内面的な状態を表し，（8）（9）は変化，(14) は時の経過設定を表している。

このように，「する」文は描く局面というアスペクト的意味と，時というテンス的意味において非常に多様であり，これは「する」が共起する語彙の多様性と，動詞「する」の語形変化によって出現していると考えることができる。一つの動詞がこのような多機能性を持つことが，「する」の大きな特徴でもある[8]。

5．対人的機能—文機能としての多機能性—

さらに，「する」は動詞としてだけでなく一文として，様々な語用論的な機能を示すことになる。山岡政紀（2000）の文機能論に従えば，（1）は発話と同時

に「開会の宣言」が遂行される〈遂行〉という機能を示し，（2）～（4）は感覚という主観的な感情を，（5）～（8）は意志という主観的な感情を表出し，〈表出〉という機能を示す。（9）（10）（13）は出来事などの事象を描き出し〈描写〉という機能を示し，（11）（12）は物や人の属性を叙述し〈叙述〉という機能を示している。（14）は文末に立てないため，一文の機能として同列に捉えられないが，時の経過を示す場面設定の機能を示していると考えられる。このように「する」文は聴者を前提として考えた場合，その表す意味は，単に動作や行為を示すという語彙的な意味に留まらず，上記のような〈遂行〉〈表出〉〈描写〉〈叙述〉といった対人機能的意味を持つのである。この点は，また別稿において述べることにし，このような対人機能的な意味の広がりまでも示すのが，「する」文なのである。

6．まとめと今後の課題

以上のように，「する」は他の語との結合度が高く，完全に一体となって一語相当になるもの，あるいはその他の動詞一語に置き換えられるもの，また形容詞一語同然になっているものもあった。これらの特徴はすべて，語と「する」との関係性が機能的な動詞結合であることを示している。つまり，「する」は文法的な機能を担うことを専らにして，実質的な意味はその結合する語が担うというものである。しかし，機能動詞結合とは本来「名詞＋動詞」の結合形態に限定されるために，格助詞を介さない「する」は機能動詞には入らないことになるが，本稿ではそれら全てを捉え包括的に考察した。そして，「する」全てが機能性を強く示す動詞であり，その広がりは，動詞でありながら形容詞との類似性を示し，動詞の中でも状態動詞，動作動詞，変化動詞，感情感覚動詞など様々な姿を示しうるものであることがわかった。これは，日本語動詞全体の中においても，その機能性，意味，用法の広がりの観点から見て，際立って多様な動詞であると言えよう。

今後は，紙数の関係で割愛した対人機能的な多機能性についても，詳細に考察し，「する」の動詞としての，あるいは動詞文としての多機能性の全容を明らかにしていきたい。

注

1）村木（1990）でも「結合のつよさ」として，「語句の挿入」「語順の交替」「連体構造への変換」などから考察している。本稿では，機能動詞結合以外の用例に対しても検証を試みる。

2）漢語として，一字漢語とそれ以上の漢語が「する」と結合し，一つの動詞のように振舞う。ただし，一字漢語の中には活用の異なるものもあり「愛する」「適する」など，未然形が「さない」の形になるものがあるので，厳密にはサ変動詞というよりも「スル動詞」と言うべきかもしれない。三字以上の漢語が「する」と結合する場合については，小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』（ひつじ書房）があるが，視点が異なる。

3）「髪を赤くする」の基本形では，髪を赤く変えるという変化の側面を描き出し，状態を示すことにならない。形容詞は状態性という特徴を持つため，「している」に変えなければならない。

4）山岡（2000）では，「程度副詞が修飾することのできる動詞述語は，量的な変化を表す動詞，様態を表す動名詞（堂々とする，のろのろする，…），感情動詞の一部（悲しむ，痛む，…）（p222）」と「属性動詞」をあげている。

5）ただし，（4）（12）はどちらも形容詞・形容動詞を必須とするという点では，すでに語結合において形容詞成分が必須であるということであり，形容詞との類似性を示すものと考えることもできる。

6）「変化」は動作に入り，「状態」は形態変化によって「ている」で示されるものである。

7）寺村秀夫（1984）でも，「基本形が現在の事象を表す（p99）」場合として，「～ガスル」を取り上げている。

8）森山卓郎（1988）が，動的事態のアルペクト的性質を持続性，結果の可逆性，終結点の有無，変化の進展性などの様々な素性の組み合わせとして類型化しているとおり，一つの動詞であっても，その出現する文中の他の要素によってもアスペクトの意味が異なる。まさに「する」はその点において，突出した幅広いアスペクト的性質を示し得るということになる。

参考文献

岩崎英二郎（1974）「ドイツ語と日本語の機能動詞」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』6

大塚　望（2002）「『する』と『やる』—非動作性名詞がヲ格に立つ場合—」『日本語科学』12，独立行政法人国立国語研究所

————（2004）「『～がある』文の多機能性」『言語研究』125，日本言語学会

加賀信広（1993）「形式動詞『する』と文法項の転送現象」『言語文化論集』37，筑波大学

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

————（2004a）「軽動詞構文としての『「青い目をしている」構文』『日本語文法』4巻1号

――――（2004b）「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」『日本語の分析と言語類型』くろしお出版
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15，日本言語学会
田野村忠温（1988）「『部屋を掃除する』と『部屋の掃除をする』『日本語学』7．11
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店
西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
平尾得子（1990）「サ変動詞をめぐって」『待兼山論叢（日本学篇）』24
松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』紀元社
Miyagawa, Shigeru（1987）"Lexical Ctegories in Japanese" Lingua 73
――――――――（1989）"Light verbs and the ergative hypothesis" Linguistic Inquiry 20
村木新次郎（1980）「日本語の機能動詞表現をめぐって」国立国語研究所報告65『研究報告集』2
――――――（1990）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
森田良行（1977）『基礎日本語１』角川書店
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館出版

（おおつか・のぞみ，本学専任講師）